〈講演〉

4．愛知大学が所蔵する山田兄弟と孫文関係史資料について

東亜同文書院大学記念センター
ポストドクター　武井義和

【司会】 引き続きまして本学の東亜同文書院大学記念センターポストドクターという形で研究を進めています武井義和さんに、「愛知大学が所蔵する山田兄弟と孫文関係史資料について」ということでお話しいただきます。ご本人は現在このセンターで多面的にいろいろな活動・研究をされております。今回のこの会も非常に一所懸命運営をしていただいております。お名前と顔を覚えていただいて、今後本学を支えていただく方になると思いますので、ひとつよろしくお願いいたします。ではお願いします。

【武井】 皆様こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました武井義和でございます。よろしくお願いいたします。本日は山田兄弟と孫文の関係を示す資料についてお話をするわけですが、発表時間内に詳細な部分まで取り上げるのは困難でございますので、主に資料整理などの観点からお話してまいりたいと思います。

現在われわれが所属しております東亜同文書院大学記念センターには、山田良政・純三郎兄弟に関する多くの資料が保管されております。われわれはこうした山田兄弟に関する資料を、一般的に山田家資料と称しております。この山田家資料は大別しますと①書画類、②書簡類、③写真類、④図書類、⑤資料ファイル類、⑥テープ類といった6種類に分かれております。このうち山田兄弟が生きていた時代の、あるいは兄弟に直接関わる資料、たとえば兄弟直筆の書簡とか兄弟が写っている写真、または山田良政の追悼文が掛け軸となったもの（孫文が書いた山田良政の追悼文で、馬場先生のご講演の中で写真が出てきましたし、また今日一番後ろの壁面の中央にも掛け軸が展示してございますが）、そうした山田兄弟に関わる、または山田兄弟が生きていた時代の資料が①、②、③に該当します。これらは言わば歴史資料と位置付けられるものでございます。この中に山田兄弟、特に弟の山田純三郎と孫文との関わりを示す資料が多く含まれているわけです。

またそれだけではなく、孫文と他の中国の革命家との間で交わされた書簡、そういったものも多数山田家資料にはございます。これは純三郎が孫文の秘書役として長年孫文の傍らにいたために手元に残っていったのではないかと考えられます。この①書画類とか②書簡類、また③写真類を全体的に見ると、山田良政は30代で早世してしまいますから、純三郎に関する資料が圧倒的に多いです。しかも彼は1960（昭和35）年まで存命でしたので、この中には戦後の書簡も多く含まれています。戦後の山田純三郎に関する書簡には日本人だけではなく、戦後中国大陸から台湾に移住したかつての革命家やその家族、または遺族などから純三郎に宛てられた書簡、また台湾の国民政府の要人などからの書簡といったものもございます。これらは戦後の山田純三郎の動静を考える上で非常に重要なものであると私は考えております。

さて、私は縁あって1995年、愛知大学大学院修士課程1年生の夏休みに東亜同文書院大学記念センターで資料整理に携わるようになりました。そして今日に到っているわけですが、この山田家資料の整理状況についてここで少しご紹介をさせていただきますと、私が資料整理に携わる前にすでに大学院生達によって、山田兄弟に関する①書画類は整理が終わっておりました。また②書簡類も山田純三郎に関するものはほとんど整理が終わっているという段階でした。しかし現在でもまだ未整理の資料が若干残っておりまして、特に③写真類は、一般公開されている分については整理済みなのですが、未公開のものは整理中でございます。と言いますのも、写真資料というのは手紙とか文書類に比べて非常に難しいんです。どういうことかと言いますと、たとえば写真の裏側に撮影日時とか写っている人物、撮影された場所、そういったものが書いてある場合は整理し易いんですが、そうでないものが非常に多いんです。ですから、いつどこで誰とどういう状況で撮影されたかというのを併せて調査していかないといけないんですね。したがってなかなか整理が難しいわけです。そのような詳細が不明な写真資料について、今述べたような調査とあわせて作業を進めている、そういう状況でございます。

先ほど申しました山田純三郎に関する書簡類なんですけれども、こちらはもうすでに資料がマイクロフィルム化されております。その点数が約600点です。マイクロフィルム化された資料は愛知大学図書館が所蔵しております。なお、山田純三郎の四男ですでに亡くなられた山田順造さんという方が、山田兄弟について研究・調査した膨大な資料もございます。それは④図書類、⑤資料ファイル類、⑥テープ類に該当します。これらは山田順造さんが勉強のために読まれたと思われる歴史に関する書籍、そして研究のために用いられた図書や論文、資料のコピー、そしてそれらをルーズリーフやノートに書き写したもの、兄弟について聞き取りをした録音テープなどが該当します。特に⑤資料ファイル類は図書、論文、資料のコピーなどを順造さんが生前にファイルしてまとめられたもので、非常に膨大な量でございます。

こうしたさまざまな形状の資料をわれわれは所有しております。現在記念センターでは山田兄弟に関わる歴史資料、すなわち①書画類、②書簡類、③写真類のうち、ごく一部分を常設展示室で一般公開しています。今からその様子を画面でご覧いただきたいと思います。

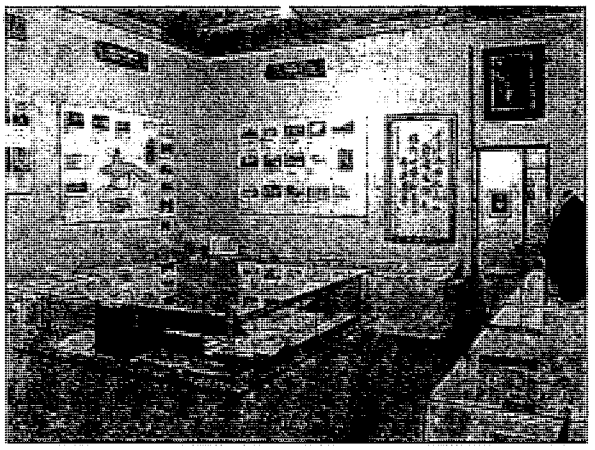
こちらは記念センターが入っている建物で、愛知大学記念館と申します。お分かりのように木造

愛知大学記念館

の建物なんですが、この建物は古くて、今からちょうど100年前の1908（明治41）年に日本陸軍第15師団司令部として建てられました。その後、第2次世界大戦末期には陸軍予備士官学校の本部として使用されていました。第2次大戦の敗北によって軍隊は解散になりましたが、敗戦後旧陸軍の駐屯地だったこの場所に、藤田先生のお話にもございましたが、中国の上海にあった東亜同文書院大学の学長をはじめ教職員十数名が日本に引き揚げてきて大学再建を目指しました。その結果、この場所に愛知大学を1946年11月に作ることになります。したがって、こちらの建物は敗戦直後から愛知大学本館として活用され、半世紀もの間、多くの事務職員が事務をとる場所になり、学生課や就職課などの組織が入っていました。

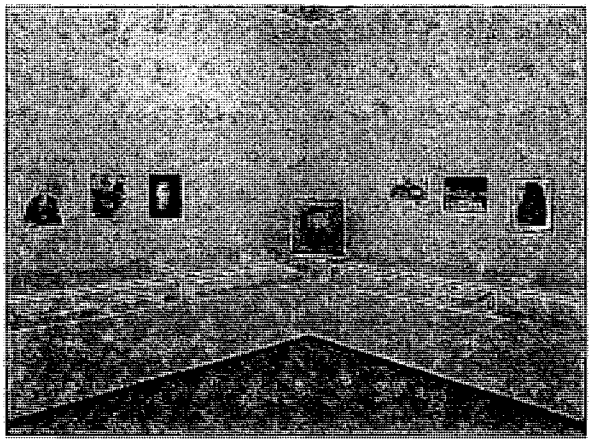
今から10年前の1998年、愛知大学記念館とし

て生まれ変わり、同年5月には常設展示室が設置され、以後東亜同文書院大学や山田兄弟に関する資料を、学内外の方々にも広く紹介している場所になっております。なお、愛知大学記念館は1998年に文化庁によって有形文化財に登録されております。



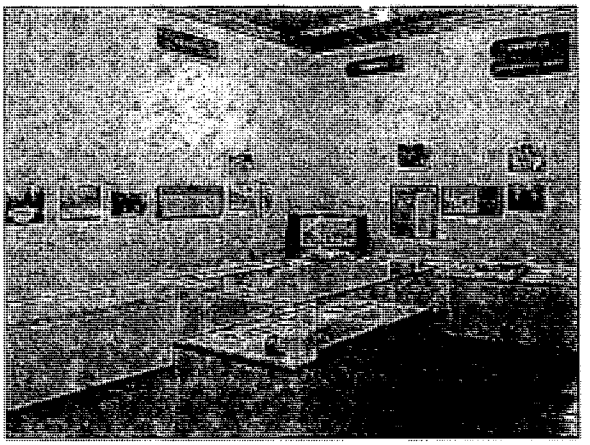
第1展示室

こちらは第1展示室と言いまして、東亜同文書院の歴史を紹介するコーナーになっております。こちらは第2展示室と言いまして隣の第3展示室とともに、山田兄弟の生涯、特に山田純三郎の生



第2展示室

涯を軸としまして、写真とか書簡類、文書類を展示しています。そのようなさまざまな資料を用いて中国の近現代史、そして近代日中関係史をご紹介しています。繰り返しになりますけれども、こういう形で展示室で常設展示している資料は山田家資料全体からすればごく一部なんです。そのさ



第3展示室

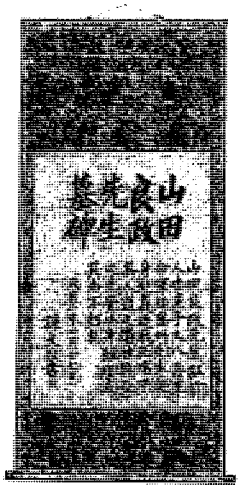
らにごく一部を今回われわれはこちらへ持参しまして、今日と明日の2日間、多くの方々にご覧いただくべく展示を行なっている次第です。

ところで、皆様の中にはこの弘前出身の山田兄弟に関係する資料がなぜ愛知県にあるのか、なぜ愛知大学にあるのかという疑問を抱かれた方がいらっしゃるかも知れません。これらの資料が愛知大学にある理由は、先ほども少し触れた山田純三郎の四男の山田順造氏が愛知大学へ寄贈してくださったからです。順造氏は東京に長年お住まいだったんですが、そのお宅の様子はある方の表現を借りますと、「資料があるどころではない、資料の中に埋まっている」という状態だったそうです。順造氏はご自分の父、そして伯父に当たる山田良政・純三郎兄弟を顕彰したいということで、個人で資料館を建てる計画を持っておられました。その資料館建設の候補となる敷地を選定したり、またその敷地獲得のためにかなり努力をされたそうです。さらに単なる資料館とするのではなく、日中友好という観点から1階部分は資料展示の場としつつも、2階部分（2階建の資料館構想を持っておられた）は日本人学生と中国人学生を住まわせる場とし、そして自分はその中で寮監という形で学生を指揮監督して共同生活をするという構想を持っておられたようです。ですが、個人で資料館を建てるのは資金などの面で非常に難しいということで、最終的には断念されました。

その後順造氏がご病気になられまして、1991年、亡くなる直前に愛知大学への寄贈を表明されたわけです。

そのために現在愛知大学はこうした資料を持っているわけですが、順造氏が寄贈を表明された背景には、かつてご自身が学ばれた東亜同文書院大学の同期生の阿部弘さんという方を始めとする、多くの方々のご尽力があったと聞いております。このあたりの詳しいことにつきましては、私よりも実際にお宅を訪問された藤田教授のほうがお詳しいと思います。また毎年記念センターが発行している『同文書院記念報』という雑誌がございますが、その第3号にそのいきさつが詳細に記されておりますので、関心のある方はご覧いただければと思います。いずれにしましても、この山田家資料は現在記念センターが所蔵する資料の中心的存在であり、今後大いに歴史研究で活用される必要があるのではないかと私は考えております。

次に、記念センターが所蔵する資料を通して山田兄弟と孫文との関係を見ていきたいと思います。スクリーンに8点の資料を映してまいります。これらは全て愛知大学記念館で常設展示されているものです。明日はこのフロアでそのほとんどがこちらに展示されることになります。まずこちらは馬場先生のスライドにも出てきましたけれども、孫文がしたためた山田良政を追悼する文でございます。後ろの壁面に同じものが展示されていますので、お帰りの際にご覧いただきたいと思います。この山田良政についてはすでにお話があった通り、1900年の恵州起義に参戦して戦死しております。その後辛亥革命が成功した翌年の1913年、孫文は日本を公式訪問するのですが、その時に書かれた文章です。この時は生死が定かではありませんでした。また仮に死んだとしてもどこで死んだのかなど、手がかりが何ひとつない状況だったんですね。しかし1918（大正7）年に良政が戦死した場所がだいたい特定されました。弟の純三郎はその場所へ行って、骨の代わりに土を持ち帰ったと言われています。その後上海の在留邦人の間で追悼会が行なわれ、また弘前では葬儀が営まれるとともに良政の記念碑が立てられました。



「山田良政先生墓碑」

これは新寺町の貞昌寺で行なわれた山田良政記念碑除幕式の写真です。われわれも昨日お邪魔して記念碑を見てまいりました。これを建てるに際しても孫文は良政を悼む文をしたためまして、それがこちらの碑に篆刻されております。孫文の良政に対する追慕の念が強かったことが分かります。

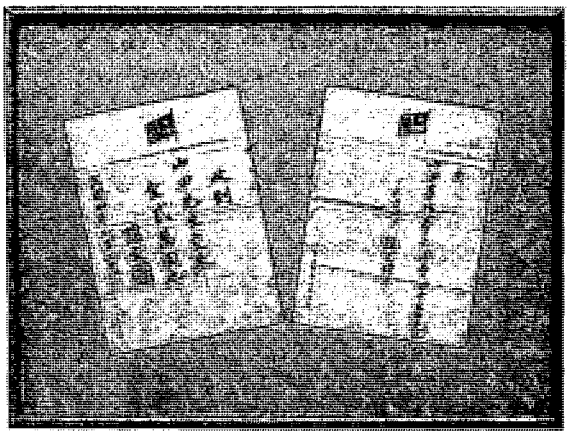
山田良政記念碑除幕式

一方、弟の純三郎は東亜同文書院創立当時からで事務員兼助教授として勤務しておりましたが、日露戦争後に退職して満鉄に入社します。やがて孫文の秘書的な役割を務めると同時に、中国の革命にも深く関わっていくようになりました。こちらは1913年、孫文が日本を公式訪問した時の写真ですが、前列中央が孫文です。そして真中の列

の一番右端が山田純三郎です。これは奈良で撮影された写真ですが、この時孫文一行は東京、横須賀、大阪などを訪問しております。そうした写真を見てみますと、孫文と共に山田純三郎が写っています。両者の密接な間柄がうかがい知れます。

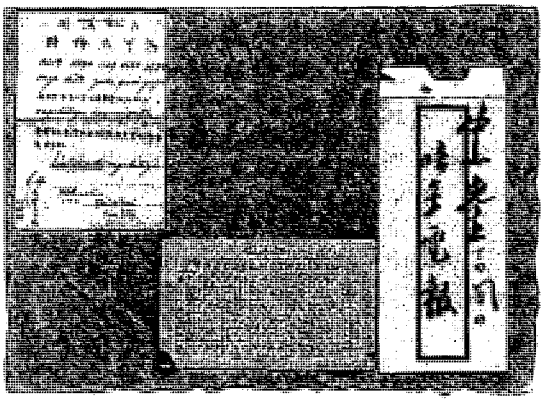
公式訪日中の孫文一行

これは革命資金に関する書類ですが、2種類ございます。左側は孫文が純三郎に与えた領収書です。「金貳万円」と書いてありますが、2万円を受け取りましたという領収書です。日付は民国4年2月2日。民国4年といいますと1915年、大正4年に当たります。一方右側は孫文の支払い命令書です。山田達が旧満洲の奉天に行くので、そのための費用4,300元を支払いますということが書いてあります。これは6月14日としか書いてありませんが、だいたい1915年頃、この領収書が書かれたのとほぼ同じ頃ではないかと思われます。



革命資金に関する書類

もう1つ資料をご紹介します。こちらは孫文と山田純三郎との間で電報をやりとりする際に用いられた暗号表です。赤い字でアルファベットが、黒い字で片仮名が書いてあります。こうした暗号表を用いて両者は電報のやりとりをしていたわけです。こうしたものは機密文書の類なのでだいたいは焼却処分されると言われています。ですからこうしたほぼ完璧な形で後世に残るのは大変珍しく、両者の間柄が密接であったことを示しているとともに、当時の中国の緊迫した状況をも知ることができる貴重な資料ではないかと思います。



暗号表

孫文は1925年に59歳で亡くなります。その後1930年代に入りますと日中関係は戦争の時代へと突入します。戦争中の山田純三郎に関する資料は少ないため、断片的な様子しか分かりませんが、戦争中は上海で日本語専門学校の校長を務め、中国人に日本語を教えるという仕事をしていました。やがて昭和20（1945）年に日本は戦争に敗れましたが、こうした敗戦の混乱の中でどうなったのか。それを示す資料を2点ご紹介します。

戦争中、蔣介石率いる国民政府は中国奥地の重慶に首都を移して日中戦争を戦い抜いたわけですが、戦後その重慶から上海に国民政府軍が進駐してきます。こちらはその国民政府軍が純三郎に対して発給した通行証です。「中華民国三十五年三月十六日」という日付があります。昭和21年に当たります。日本敗戦当時、上海には約10万人の日本人が住んでいたと言われていま

すが、敗戦と同時に日本人は中国側が設定した集中営（収容所地区と言ったほうがいいかも知れません）への移住を余儀なくされます。そしてそこから引き揚げ船に乗せられて日本に送還されるんですが、その間の行動は中国軍の管理下に置かれていました。けれどもこの資料には、「かつて孫文の革命に協力したことによって、通行の自由を認める。日本人管理の適用外とする」というようなことが書いてあります。つまり他の日本人と同じような管理下には置かず、優遇措置を認めるということを示しています。居住、そして行動の自由を示す証明書です。

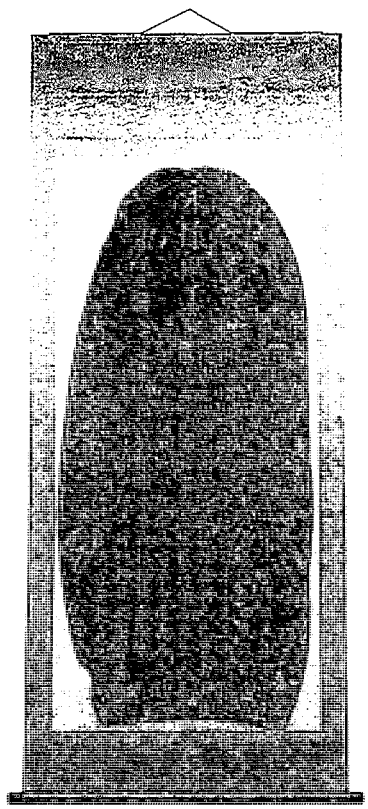
通行証（証明書）

こちらは同じ年の5月にやはり中国国民政府軍が上海で発行した雑誌です。『導報画刊』というものですが、表紙が非常に鮮やかな赤色です。60年以上経っているとは思えないぐらいきれいな色です。この中で山田を紹介する記事が2頁にわたって掲載されています。メインタイトルに「山田純三郎先生訪問記」とあり、その前の部分に「中国革命之友」と書いてあります。中国の反日感情がここ数年高まっていることがニュース等で報道されておりますが、それよりも遥かに反日感情が強かった日本敗戦直後の時代でさえも、山田純三郎は孫文の協力者として中国側から高く評価されていたということが、こちらの雑誌、そして通行証から読み取れるかと思います。

ごく僅かの資料しかご提示しませんでしたけれども、孫文と山田兄弟は強い絆で結ばれていたということが改めて分かるかと思います。なお、山田純三郎は他の日本人と少し遅れて1948年12月に上海から引き揚げました。そして戦後は、1960年に亡くなるまで東京に居住します。しかしながら、彼と中国革命との縁は亡くなってもなお途切れることがございませんでした。こちらは死後16年目の1976年、貞昌寺に建てられた山田純三郎記念碑の拓本です。これが後ろの壁の一番右側に展示してございます。この碑の上部には「永懐

「導報画刊」

風義」という題字が篆刻されていまして、これは「永く立派な行ないを思う」という意味です。題字の左側に、少し字が小さいですけれども「蔣中正題」と篆刻されております。つまり「蔣中正」という人物がこの「永懐風儀」の題字を贈ったんですが、この人物は蔣介石のことです。純三郎と孫文、そして中国が深い縁で結ばれていたことを示す資料と言えるのではないかと思います。



山田純三郎記念碑拓本

以上、山田家資料の概略と共に、資料を見ながら山田兄弟と孫文との関係を簡単にお話ししてきました。最後に2点ほど述べてみたいと思います。まず試論という形で述べさせていただきますが、この山田良政・純三郎兄弟を同時代に生きた日本人の協力者、たとえば宮崎滔天などが孫文の協力者として挙げられますが、そうした人達と比較しますとあまり有名ではありません。しかしご覧いただいた資料からお分かりいただけますように、中国やアジアへの蔑視が強かった当時にあって、兄弟は中国に目を向け、孫文の革命活動に協力していったわけです。兄良政のほうは不幸にも30代前半で亡くなりますが、孫文は良政に対して後々まで深い追慕の念を抱き続けました。一方、弟の純三郎はそうした兄の遺志を受け継ぐように孫文の側近として活動し、革命に深く関わっていきました。この行動が、日本が戦争に敗れた直後においても中国側から高い評価を受けたということは、すでに申し上げた通りであります。これらの点は馬場先生が孫文の言葉を引用されていたように、正に山田兄弟が真摯な気持ちで孫文に協力すると同時に、中国と向きあっていたことを示していると思います。その背景には兄弟共に革命に関わる前から中国に在り、そして中国の現実に接していたことがあったと考えられます。いずれにしましても山田兄弟のこうした姿勢は、今後の日中関係のあり方を考える上での1つのよき材料となるのではないかと私は考えております。

もう1つ、この山田家資料を活用した今後の研究のあり方について、資料整理の立場から述べさせていただきたいと思います。これは山田純三郎について言えるわけなんですが、彼は1960年に83歳で亡くなりましたので、戦後の部分の書簡もかなり残っています。その中には冒頭でもお話ししましたが、戦後大陸から台湾に移住したかつての同志や革命家たち、またその家族や遺族から送られた書簡などがけっこう残っております。現在のところ孫文の秘書役を務めた時代の、戦前の山田純三郎に関する資料に主に注目が集まっているわけですけれども、こうした戦後の部分も今後は対象としていく必要があるのではないか。そうすることで純三郎の一生涯がよりいっそうはっきりと浮かび上がってくるのではないかと思います。日本敗戦後、中国国民党と共産党は国共内戦という形で戦争を繰り広げ、1949年蔣介石率いる国民党は台湾に逃れ、大陸では中華人民共和国が成立します。その後1950～60年代、またそれ以後も台湾海峡は長らく緊張状態にありました。そうした状況下で台湾に移住した革命家たちや台

湾の要人と、山田純三郎との間で手紙の往来がありました。また純三郎は1954年に台湾を訪問して蔣介石らとも再会しております。したがって純三郎の戦後史の部分にも焦点を当て、戦後の東アジア史の一側面としてとらえる、そして分析していくということも、今後の重要な課題かと思います。たとえばその中で戦後の中国に対する純三郎の認識、そして戦後の人間関係、やや専門的な言葉では人的ネットワークと言いますが、そうした結びつきが戦前と戦後でどのように変化したか、どの部分がつながっておりどの部分が断絶したかといったようなことも、これからの研究の課題になるのではないか。純三郎の生涯を戦前から戦後までつなげて、さらに浮き彫りにしていくといったことが課題として挙げられるのではないかと思います。いろいろとお話をしてまいりましたが、いずれにしても山田家資料は中国近現代史や近代日中関係史を考える上で大変貴重な存在であり、宝の山であると言えます。今後われわれは資料整理をさらに進めてまいりますが、その成果を何らかの形で多くの方々に還元していく必要があると考えております。

拙い話でございましたが、以上で私の講演を終わらせていただきます。皆様ご清聴ありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。引き続き最後のほう、繰り返し出てまいりました貞昌寺住職の赤平様から、せっかくの機会ですので最後にお言葉を賜りたいと思っております。なお、ただいまの武井さんの発表の中にもございましたように、われわれは多くの資料を持っておりますので、どうぞご関心のある方々はコンタクトをとっていただいて、いろいろご研究、ご調査等お役に立たせていただければと思っております。今日はいろいろと新発見等もあったかと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

【赤平】 新寺町の貞昌寺でございます。先ほどからいろんな山田家のお話が出ております。私の小さい頃は山田「りょうせい」というふうに聞き覚えがあるんですけれども。純三郎さんのご兄弟のことを一番知ってなかったのはわれわれ弘前市民だろうと。地元の人が本当は一番知っていなければならないのが、一番知らなかった。おかげさまで愛知大学のご協力があり、また東京あたりにも研究しているグループがございます。本当に弘前が一番だめかなという気がいたします。

ひとつ山田家がどういう家柄かというのがずっと外れていますので、私は菩提寺として山田家の家柄をご紹介いたします。貞昌寺の成り立ちから考えると、貞昌寺というのはそもそも津軽為信公が自分の母親のために建てたお寺でございます。ですから明治以前までは檀家はほとんどございません。殿様の許可をもらった人でなければ入れなかったお寺です。その頃から山田家はお墓がございまして檀家さんでございます。ですから家老にはなっていないようですが家老に準ずる家柄であったことは間違いないようです。戒名も代々「院号」、「院殿号」が付いてございますので、立派なお家柄であったということだけは確かだろうなと思っております。あと山田良政さんは生きているうちにお墓を立てておられます。貞昌寺の1つのお墓にお父さんの戒名とお母さんの戒名と自分の戒名が彫られてございます。今は消えて無くなりましたけれども私の小さい頃は、良政さんの戒名の「居士」という部分に朱が入っていました。朱を入れるというのは生きているうちにお墓を立てたということです。両親と一緒に自分の戒名を彫ったということだろうと思います。

今、日本と中国との関わり合いは中国本土ですけれども、その前、台湾と国交があった時には、台湾の大使が日本に赴任する時必ずお参りをされました。警察が私服やら何やらできっちりとガードして。孫文の書いた良政さんの碑しかなかった時代です。その後純三郎さんの碑が立ちましたけ

れども、良政さんの碑やお墓のところに、わざわざ東京からお参りに来ました。退任する時にまたお参りに来て大きな花輪を捧げました。ですから向こうの人達はそういう「恩」というものに対してすごいのだなということを感じました。中国のことわざに「水を飲む時、井戸を掘った人を忘れるな」というのがあるそうでございます。われわれもやはりそういう先人の思い・遺徳を忘れることなく顕彰していければなと思いますし、これからも皆様のご協力をお願いしたいと思いまして一言ご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。特に赤平様には今回のわれわれの企画の一番の原点でいろいろご協力やら企画のご提案をいただきまして、大変ありがたく思っております。貞昌寺のほうにただいまご紹介いただいたような、あるいは武井さんが先ほどご紹介いただいたような現物が残っておりますので、ぜひ弘前の方々も貞昌寺のほうへ伺っていただければと思っております。

以上をもちましてわれわれの第1日目の講演会を終わらせていただきます。本当に長い時間でありましたけれどもご清聴ありがとうございました。今後も今日のようなテーマでさらにまた研究を進めていくつもりでございます。ぜひ弘前の方々もご関心をもってご研究を進めていただければ幸いでございます。なお明日はこの会場でパーティションを組みまして、われわれが持ってきてまだ奥のほうにしまってあるものを全部お見せしたいと思っておりますので、ご足労をかけますがお時間がございましたら、明日もう1度お出かけいただいて閲覧していただけたら大変ありがたいと思っております。何かご質問等ありましたら、今日ここは6時までやっておりましてわれわれもおりますので、適当につかまえていろいろご質問いただければありがたいと思います。それではどうも長時間にわたりまして、いろいろありがとうございました。